

るが右の惨状につき警察部にて更に調査したる所に依れば流出家屋は大字飯詰にて十八戸、味噌ケ沢にて三戸、浸水戸数は大字飯詰にて五十戸、味噌ケ沢にて十戸溺死者三名(男一名女一名)行方不明者一名(女一名)なること確かめたりと云う同地稀有の惨状なりとの報あり」

との記事になっている。この文面から推し計っても明治の終りの交通、通信網はいかに不備であったかを伺わせる。今日の新聞なら上段見出しの惨状報道になるのだが当時としては一般記事十五行の枠でしか報道されていなかった。

また飯詰村史にはもう少し詳しく次のように記述されている。

明治四十四年四月五日、飯詰、松島、中川、嘉瀬四ヶ村二亘り五百廿四町歩餘の用水タル范ノ沢溜池ハ欠潰シ其ノ損害左ノ如シ

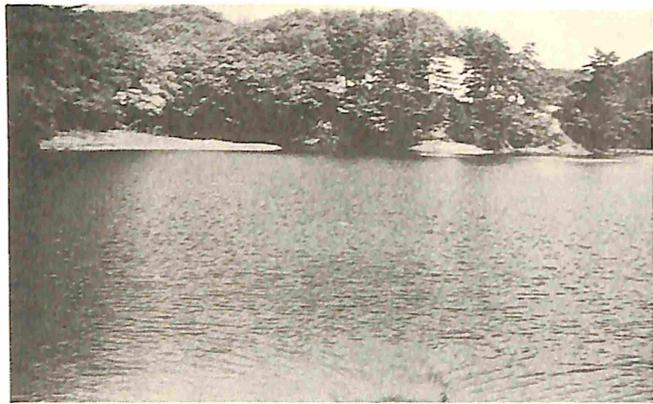
- 一、浸水家屋、五十餘戸数、流失家屋一五戸、死者四名(男二女二)
- 二、田地の埋没セルモノ五町二反歩、荒地トナルタルモノ七町五反歩、土砂侵入当年田作ハ見込ナキモノ三六町五反歩、桶管ノ流出四五ヶ所、堰ノ破壊二八〇ヶ所、水路破損一六ヶ所、被害四萬二千五百二十四圓余り

以上のように一つの溜池の欠潰により多大な被害が出たわけではあります、当時の范ノ沢溜池の満杯時の水量は今にしての推計は不可能であっても、欠壊による被害額を今の金額に換算して六億二千万円を越えるということは、いかに被害が莫大であったかを知ることができる。

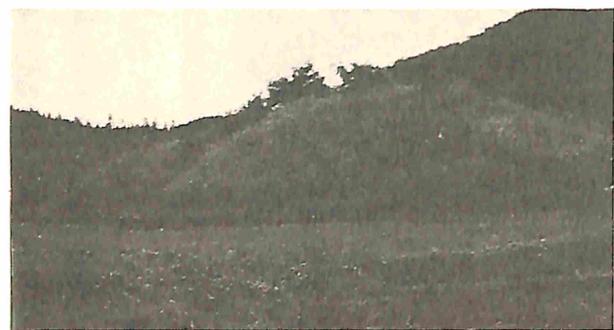
味噌ケ沢の村落は伝説に富んだ村落である。飯詰本村からは二キロ以上も離れて特に冬には陸の孤島と云われ日常生活に難渋を極めたであろう。それ故に往時(昔)としては落人の隠れ里としては適当な土地であ

旧曆十二月十二日は山の神を祭る日で山に關係する人はすべて下山し労働から解放されて休息の一日でありましたが、味噌ケ沢の村落は森林に囲まれ、山の神は生活のなかの絶対神で、十二という数字を部落の戸数に当てはめて、禁を破って十三という数字つまり十三戸となったから神の怒りにふれ災害が起きたのだという。

合理的な解釈からすれば笑い話に聞えますが、信仰からの畏怖と部落の姿、狭い範囲、少ない耕地からすれば長兄が家という制度を維持する為にはかっこうないわれごとであったかも知れない。平成元年八月十三日盆の日に記念碑の前には子孫の方たちのたむけた花と線香が薄くたなびいていた。



平成元年8月15日旱魃をよそに満々たる水量の范沢溜池



味噌盛

ったかも知れない。今は近代的な生活を営むにはあまりにも不便をかこつものだから、昭和四十九年最後までに残った五世帯が嘗家離村をし、今は五所川原市の野鳥の村、史跡の村として人々の気持ちをなごませて

いる。新緑がもえぎ出す頃には溜池というよりも小さな湖という神秘的な様相を呈しながら、カルガモが群で泳いだあとの水紋などは大きな静の中に小さな動があるようで風景は実にすばらしい。

古墳といわれる味噌盛は耕作水田の最後の所にたんぼに囲まれ、瓢箪型の形として存在しているが、その昔、豪農の味噌蔵跡であったとか、又盛土色が味噌玉の色に似ているから味噌盛と名づけたとか、とにかく何かありそうな奇異な土盛である。規模は周囲が一〇八米、高さ九米で、いつかは発掘調査が行なわれるだろうが、いにしへの夢は夢として静かに保存するのをもひとつの方法であろう。

明治四十四年四月五日溜池の堤防欠壊の位置は現在の堤防より五十米中程にあり、今でも水量が半分以下になると垣間見ることができですが、七十年の年月を経たこともあろうか貧弱な堤である。明治四十四年七月には現在位置の堤防が完成し、昭和六十二年に更にかき盛、整備して満水時には水深二十五米にも達するほどの深さを示し、津軽における溜池の中でも有数の深さを持つ溜池となっている。

惨害をともに受けた味噌ケ沢部落においては災害時十三戸であったが、部落の戸数が十二戸を越すと、山の神、水の神が怒り出して災害をもたらすと云え伝えられ、それ以後次三男は部落に分家することを許されず戸数は十二戸をもって変わりなく何十年も続いてきたのである。

神佛混淆御仕分に関する御布令

社人一村兩社持宮ニ而佛体佛號之社ヲ其村鎮守ニ致シ来、此度祭神之神號相改佛体取除候共正數神社之方以來鎮守ニ致シ候様

一、一村兩社一人持ニ付差除之勤モ無之、尤持方ニ於テモ追々修覆勞諸物入モ相減可申候間、右様の社ハ堂連取毀廢社猶一村一社ニテ佛体佛號之分ハ、前書従前祭神之神號ニ相改其儘崇敬致シ候様

但本文廢社之佛体へ従前祭神勸請神之儀ハ、新二鎮守之社へ相納置候様

一、社人持宮ニ而鎮守無之佛体佛號之社ハ勿論、神体神號ニテ格別由緒無之分、別社未社上納之上、廢社神体ハ鎮守社へ合社、何レモ堂建取毀致候様

一、修驗持宮ニ之儀ハ、村々鎮守堂タリ共朝廷被仰付之御趣意ニ基キ、神体神號之社ハ勿論、佛体ニテモ神號之社ハ佛体取除キ最寄之社人へ相讓候様、尤右修驗前顯社之為生活ニ相拘候ハ、復飾之上社人之號ニ、相転ジ、神道ヲ以テ奉仕願出候様被仰付候事

一、修驗持宮ニ而神体神號並佛体佛號ニテモ、村々鎮守ニ無之別社未社之儀ハ、神体社ハ神像上納之上廢社、佛体社ハ鎮守堂へ合社何レモ堂取毀候様

一、諸社ヨリ上納佛体の儀ハ、従前最勝院別當之社ハ同院へ御預、修驗持神社神体ハ社寺署役所へ相納候様、尤諸社之内往古外寺院へ因由有之候ハ、基段申出古寺院へ相納、修驗持宮神体同格外神社ニ因縁有之候ハ、右社へ相納候様

一、神佛混淆御仕分濟之所ニテ社寺領並廢社共御再檢之上、社家寺院分明ニ仕分之上御元張並圖成出来永世境論無之候様被申付候

明治三年十月

民事局 社寺屬事

註、この御布令に依り廢佛毀釈の嵐が吹き荒れたのである。

小山内漫遊上人を想う

財団法人日本民謡評議員

湯 本 正 美 (嘉瀬出身)

小山内漫遊さんは、だれよりもふるさとの民謡を愛し、その普及発展に努力した人です。

なかでも津軽民謡の元祖といわれた「嘉瀬の桃」こと黒川桃太郎を畏敬し、桃地蔵を製作、昔、桃太郎が唱を練習した観音山にある観音堂へ安置、後世へ残したことでわかる。

昭和五十年頃、私が諸用で東京より帰郷した際、小山内さんが観音堂に居住されているというので、お邪魔したことがある。この写真はそのとき、写したのですが、桃地蔵の後に民謡大会のビラが貼ってありました。

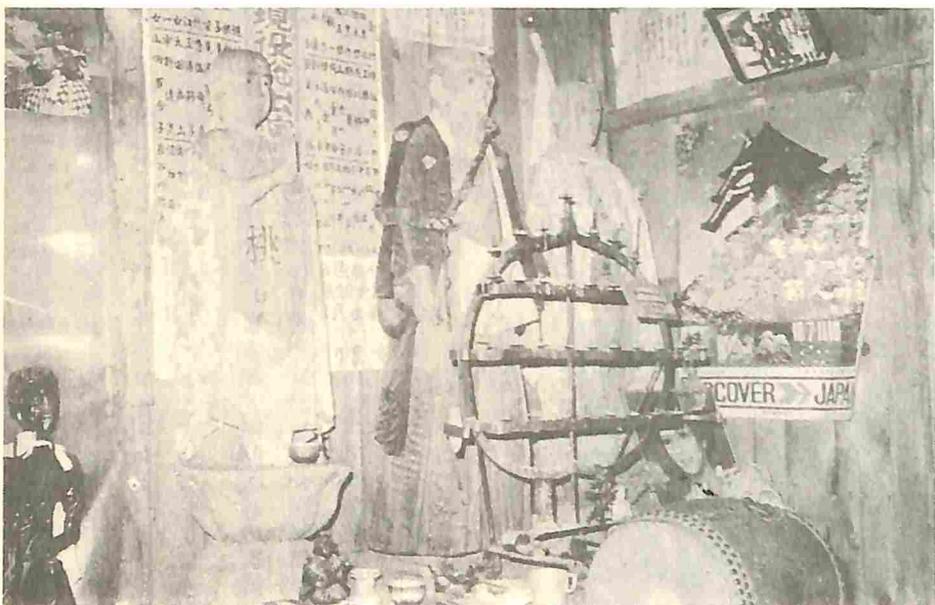
桃地蔵とビラ

当時の津軽民謡界の代表的歌手たちの名前がズラッと並んでいます。今では貴重なビラと成りましたので、参考までにお披露します。

尚始どの歌手は、現在も東京で活躍しています。

私は、この写真を見るたびに「この大会に嘉瀬の桃を歌わせてやりたかった」と、地下に眠る漫遊さんは想っているに違いない。

(東京都品川区在住)



叔父小山内漫遊について

小山内 嘉一郎

小山内 漫遊 本名小山内嘉七郎

明治二十九年九月二十八日生まれ、

本籍地 青森県北津軽郡金木町大字嘉瀬

父嘉之助、母みね、の次男

昭和五十三年三月二十日死去(行年82才)

母は病弱のため医者から、お腹の子を生まないように奨められた。ところが無理を押し生んだ子が漫遊であった。

漫遊が生れた同じ時間に、家の屋根に大きな鷲が飛んできて暫く動かなかったと、生前それを誇らしげに言うのが口ぐせであった。

漫遊は晩年『私は誰の世話にもならないので世へ行く』と何度となく言った。三月といってもまだ寒い時期に誰にもみとられず静かに他界しました。翌日用事があって漫遊の住居である嘉瀬の観音堂を訪ねた報道関係の人が発見したものである。

漫遊は幼少の頃から一徹でなかなかのきかん坊であった。兄(私の父)や姉妹たちも漫遊のわがままをもてあましたという。

小学校の同級生六十人ぐらいの中では、いつも五番以内であったとか。

でも操行が悪いので六年生になったら、先生から今後学校には来なくてもよいと、半ば退学状態になって中退したそうです。

学校を出た後は家の農作業を手伝い、十五の春から近くにある造り酒屋に年雇いで働いた。

米かつきなど力仕事が多く、夕食時のお酒は飲み放題であった。二十の頃は米九斗(百三十五キロ)をかつぐ力持ちになり、酒も一升(1.8リットル)はいつでも飲めるようになった。

晩年になってからでも私の田植えによく手伝ってくれた。苗とり作業だから朝五時から畦畔からあふれる程に水がかけられ、それに入っている仕事である。作業前に酒を飲み、その後は一時間刻みに休憩しては酒、正午までには一升びんが空になる。確かな漫遊も大寅に変身して苗とりなど、どこ吹く風です、遂に畦畔に寝ころんでその日の作業は終る。

六十を越してからの漫遊の飲酒量は減った。

それでも三合から五合の酒は飲めた。酔っぱらうともう漫遊の世界であった。(誰でも同じ)

自民党から共産党に至るまで、徹底的にこきおこされた。批判されな

いのは皇室と漫遊と憂国の志士だけである。敬神崇祖の念は特に厚かった。壮年期には東京芝の増上寺の門番の役を長年にわたって勤め、有名な山門が戦災からまぬがれたのは漫遊が勇

敢に活躍した結果だと、増上寺から感謝状をいただいた。

戦後家族を東京に残して単身郷里に帰ってからは、観音堂を住まいとして、かつぎ屋をしながら、赤石川の水害犠牲者、車力村のチースポロー遭難者、百沢土石流犠牲者、郷土の偉人山中利一先生、民謡元祖の桃の供養など枚挙にいとまない程多くの故人の慰霊と供養に心身の限りをつくした。

漫遊は小学校の頃は町内のガキ大将であった。自分の弟や妹が多かったので、いつも子守をさせられた。ところがその子守を自分の後輩たちに強要してやらせ、自分は川やお宮などに遊びに行き、なかなか帰らないで、代役の後輩を困らせたということを伺ったことがあった。

漫遊は身軽で高い所に昇ったりする特技があった。木登りなど名人級、三十台の頃、宅地にあつた高さ二十五米もある大きな木に、簡単に昇ったことなど幼少の頃の私も知っている。芝の増上寺の山門を戦災から守ったのも五十台になっても身軽であった証である。

漫遊は肉体的にも頭腦的にも恵まれた素質があった。昔（明治から大正にかけて）家が貧しかったので、学校も小学校より行けず、肉体労働で生活することより道がなかった。素質を十分に生かせず、八十の坂を越えても、青年のような夢と希望に燃えていた。

漫遊は二度目の結婚にも失敗した後、大正七年シベリア出兵に志願した。そこでは原住民が零下三十度の酷寒に、素手でアザラシを取る作業をしている。手がごいそうになれば、ピョンピョン跳ねながら両手を自分の背中まで、伸ばして強く打つ、これを十回以上も繰り返せば手も体も暖かくなるので、また作業をする。漫遊はこれを体得してアザラシ体操または耐寒体操と名づけて、帰国してから刑務所や自衛隊にも普及

に廻ったのです。

漫遊はシベリヤから樺太に渡った。間宮海峡は氷結していたので徒歩で仲間と一緒に渡った。樺太では袖夫そまぶをしたり、製材所でも働いた、当時樺太では人手が不足で結構よいお金になり、三年である程度の貯金もできたので帰郷した。そして長い間の念願である母を伴って、京都、奈良、東京方面のお寺詣りと上方見物をした。その頃の津軽では『上かけ』とって一生涯の夢であった。大正十年代である。

その後漫遊は東京に出て、同級生でもある山中利一氏のお世話になった。柔道など護身術を身につけ、傍らに民謡教室にも通い他県の民謡をマスターしたのである。ラジオ放送が始まって間もない頃に、広島、熊本放送局から民謡放送したことは当時としては珍しいことであった。

民謡の漫遊と、尺八名人の菊地淡水さん、それに柔道師範（名前は不明）の三人で世界漫遊をすることになって種々準備を進めたが、結局資金などの都合でとりやめになった。その頃から仲間が漫遊と呼ぶようになったという。

こうして大きな計画は果たさなかったが、漫遊はその後県内は勿論、県外、時に東北、北海道の大半を一人で民謡を興行して歩いた。昭和の始め、私がまだ幼少の頃、何千枚もの漫遊民謡のチラシを家に置いたままであったのを記憶している。この時の漫遊の顔写真は、広島放送局のスタジオにおける、民謡放送の一コマであった。



伝記の人 小山内漫遊

漫遊はここを根城に、東奔西走、特に北は小泊めざして行脚の数が多かった。

権現埼については中国秦の始皇帝に使役した役の行者ゆかりの地として固い信念でそのゆらいを記念すべく御堂建立に情熱を傾けた。早くから津軽民謡の源流が嘉瀬部落と信じ、その代表的人物が黒川桃太郎こと嘉瀬の桃の像を刻むことに誓い、東京時代の親分、同郷の山中利一からすゝめあって、たまたま親しく交際していた青森県が生んだ世界的版画家棟方志功にその原画を依頼し、その原画をもとに親類筋の小山内晴夫に木像の桃像を彫刻させ完成したのが現在観音堂に安置されている桃

嘉瀬に生を享け嘉瀬をふるさととした数多くの人々の中に、波乱の一生を嘉瀬観音堂に八十有余の生涯を終わった小山内漫遊の面影は昭和時代の嘉瀬人にも記憶新しいものがある。

一人寂しく日頃常住の館とした観音堂で、老齢の寿命を全うした時、村人の殆どは漫遊の死を知らなかった。

古びたお堂が漫遊の獨占的なものになった頃、観音講中の人々が村の小学校新築を機会に教室を払い下げ、すぐ近く北側の一角に新しい観音堂を建立したため、古いお堂は黙認のかたちで、晴れて漫遊の住居となった。

漫遊はここを根城に、東奔西走、特に北は小泊めざして行脚の数が多かった。

地蔵である。

棟方志功との交遊については今一人八甲田酸ヶ湯温泉で軍服姿も勇ましく胸にたくさんのお勲章を下げた鹿内仙人も昭和の三奇人として肝膈相照した仲であった。この三人はよく酸ヶ湯に集まり夜が更けるまで、それぞれの人生について語り合った。

津軽地帯の観光宣伝では弘南バスが全線の無料パス券、津軽鉄道は五所川原、中里間の無料パス券を交付して漫遊の沿線観光宣伝の功に酬いていた。

若い時は北方千島列島からカムチャッカ、樺太、ソ連沿海州を踏査した体験者として辛酸をなめたが大の共産党嫌いで、天皇絶対の信念は純粹にこれを貫いた。

生活の困窮に突き当たっても他人の施しにすがるとか、人をペテンにかけるとか、正に清貧に甘んじてその生涯を終った。

東京に住む妻子への仕送り等は血が滲む努力の連続だった。

小泊、下前の人達は海産物を提供し漫遊に仕送りの一助を為した。

八甲田の鹿内仙人は酸ヶ湯で、漫遊は岩木山赤倉沢をはじめ前人未踏のけわしい岩木山の沢々を踏査し、自らを小山内仙人と称し、山伏姿で、県内隈なく活歩した。

漫遊の臨時収入の中に若い頃北方領域で覚えた耐寒体操も役立った。

彼はこの体操をアザラシ体操と名付けた。各地の刑務所、自衛隊を訪問してその実技を披露し、謝礼を得ていた。

真冬の寒い日にシャツ一枚になりバケツに水と氷を入れ、気合いもろとも握り拳をそれに突っ込み、十五分位で水の中の氷はいつの間にか溶けるのをはたで見ている者は身震いしたと聞いたことがある。

獄中に薄着でふるえていた人達にはこの耐寒体操即ちアザラシ体操なるものは有難い実技であったと思う。

作家三島由紀夫の葬儀に参列し、その死を悼み国粹主義者としての行動的語り草もある。

甥に当たる小山内嘉一郎君に身近な思い出はさること乍ら、少年、青年、そして中年から、晩年にかけての漫遊の実績に花を添えて伝記の人と書き進んだならば、直木賞作家の長部日出雄が「津軽世去れ節」を書いた以上の嘉瀬人の像が浮かんで来ると思う。

できればかたりべの各位漫遊についての聞き書抄でもお寄せ下されば第二の「津軽世去れ節」を纏めて見たい。

追記

漫遊が東京で生活していた頃、「はままちょう」駅の近くでバツタリ出合ったことがあった。芝の増上寺詣りしようとした時である。

後方で大きな声で「木立さん！」と呼びかけられて、東京のド真ん中でまさか私を呼んでいるとは思ひもかけなかった。それが漫遊だった。

近寄ると「どうして浜松町に」と話しかけて来たので、私も「どうして小山内さんがここに」とききかえした。

山伏姿でなかった頃の漫遊はネクタイ無しの全くブラリ散歩格好の軽

ここで一寸話はわき道にそれるが、このタワー建設を企画し、それを実現した雄大構想の実業家と一夜赤坂の料亭で飲んだことがある。

宴席の設営したのが三和精一代議士で私と南郡常磐村の浅利崇と四人で、実業家の愛娘が、その年のミス日本に選ばれ実業家は娘を宴席に電話で呼び、私等に酒をお酌してくれた。

ペラ棒にでっかい構想の持主で流石に三和代議士も煙に巻かれグウの音も出なかったことを覚えている。

その時たまたま漫遊の話が出た。

タワー建設に際し、徳川何代かのお墓にタワーの用地がはみ出すので、その撤去に当たって増上寺と交渉した時、山門付近に住んでいた漫遊の小屋が無人になっていたが、既得権はまだ漫遊にあった、そのことが寺側には気掛かりであった。

ところが工事施工者は無断で撤去してしまった。後でそれを知った漫遊は別に文句一つ言わなかった。実業家の話では、この件で居住権の漫遊からゴネ話が出れば立派な家を建ててやる腹だったという。

全く世の中狭いものである。漫遊と同郷の男が実業家と同居してその話を聞いているのだ。大分経ってから、漫遊にこの話を知らせると、彼は、「長年面倒見てもらった増上寺の都合でそうしたなら、それでいいだろう」と笑顔で私に云った。

普通人でない漫遊の横顔である。



い服装だった。

生気に満ちた漫遊の久し振りに見た東京の姿だった。

「ここはワの居る町だよ。何はともあれワの家さよっていきへじゃ」ということになって漫遊はドンドン先に立って歩いた。

大門を過ぎて足は私がお詣りしようとした芝の増上寺近くなって、「ワの住居は増上寺境内だよ」と云った。

大きな山門をくぐるとすぐ右側に平家建ての家が見えた。増上寺には全く似つかない建物、それが漫遊の住み家だった。誘われるままに家の中に入ると奥さんが快く迎えてくれた。

青森の故郷から来た人だということをお奥さんに説明していた。

一時間程お茶を飲み乍ら話しているうちに、増上寺境内に住む経路をきかしてくれた。

大東亜戦末期の東京空襲で増上寺山門が焼夷弾で危うく焼失しかかった時たまたま漫遊、その近くを通りかかり、体操で鍛えた身軽も手伝って仰ぎ見る高さの山門の上によじ登り、必死の働きで飛び散る火の粉を振り払い消し止め、山門を安泰のままに残した功績が認められて焼け野原の東京にあって増上寺は漫遊の小屋を建てて境内の住居を許したのが私にきかせてくれた物語の一部であった。

増上寺と云えば京都智音院は西の浄土真宗の総本山であり、東京芝の増上寺は東の浄土真宗の総本山として有名であり、また芝増上寺は、徳川代々の菩提寺として今日に至っている。

すぐ西隣に東京タワーが高く聳えこのタワー建設に当たっては種々難航したが遂にこれを完成し膨大な建築費を投じた東京タワーが三年後その入場料でチョンになった話が有名である。

民謡で世界行脚を

小山内漫遊君の計画

津軽小原節というのが近ごろカフェーまで進出して来た。世相は民謡にきけ！といわれる通り、民謡はまた郷土の先祖の経験して来た人生の記録だ。この民謡を提げて日本の民族の生地そのままを伝え、そして各国の各種の民謡を集めて来たいという希望で近く外国へ行く県人がある。

北郡嘉瀬村生まれの小山内漫遊君である。

前後十年にわたって日本全国、シベリアから朝鮮、支那へ巡って四百余種の民謡を習い覚え、シベリアや支那にいた時は日本軍や張作霖のために一種の陰密使をつとめたこともあり、数奇な道をたどって民謡歌手として知られるに至った。

近くは熊本、広島などでも放送もした。日本の民謡を一通り集め民謡にこもる日本の伝統精神を知ることのできた彼は、これを世界に紹介したいという希望をもって外国行きを計画したが、今度東郷元師、一戸大將、頭山満氏などの名士の賛助を得ていよいよ八日、ハワイへ渡ることになった。

ハワイから米、仏、チェコスロバキア、イタリア、インド、支那、シヤム、南洋諸島を六年間の計画で回る旅程で、旅費はもとより行く先々で日本の民謡音楽会を開いて得ようという計画で、恐らく日本人として最初の試みであろう。

氏は郷土告別と病父見舞いのため最近帰郷したが、本社編集局を訪ね

て語る。

「私は民謡研究以外に日本の伝統精神の吹聴及び世界各国にいる日本人の慰問をかねて行きたいのです。そしてほんとの世界平和は国の純粋な芸術交換によりてのみよくなされると思いますが、その役割も果したいという希望です。」

(東奥日報 昭和4・7・2)

嘉瀬村に「桃地蔵」建立 津軽民謡中興の恩人偲ぶ

津軽民謡が今日の隆盛を見た中興の恩人「嘉瀬の桃」の功績を偲ぶ桃地蔵が、仏像の版画では既に全国的存在である青森市出身棟方志功氏の三尺八寸の下絵に基づいて、「桃」揺籃の地である北郡嘉瀬村に建立することとなった。津軽民謡に多少とも関心を持つ人であれば、嘉瀬の桃といえは、「ああ、桃か」とすぐ合点が行くほど左様に「嘉瀬の桃」は人々に膾炙(かいしゃ)され親しまれている。「桃」の本名は古川桃吉(編集部注)桃の本名は黒川桃太郎)といつて三歳の子でも知っている「嘉瀬と金木の間川」で有名な北郡嘉瀬村の生まれである。

ある意味においては県史の一断面であり津軽地方のプロフィールでもある津軽民謡が、明治末期に及んで素晴らしい勢いで農山村にまで浸潤してきた開花の歌謡に圧倒されて、津軽民謡を口にする者が少なくなった。この時祖先からの原始的な芸術であり我々の生活として残した民謡を守って起こしたのは「嘉瀬の桃」であった。しかし当時は今日のように蓄音機やラジオ等の宣伝方法があったわけではなく、また、これを筆紙に託

して世に問うほどの学識があったわけでもないで、いわゆる「唄い子」として村から町へ、町から部落へと三味線一挺手にして興行して歩く方法がなかった。

「桃」の苦難時代であり芸に磨きのかかった頂上は明治末期から大正中期であったろう。この頃は初代津軽すわ子を一座に入れ、興行もにぎやかになった。「桃」が津軽民謡を興隆させたのは努力もあったが、やはり彼の美声とその底に光る深さが魅力であった。浪花節もまた上手で、地方巡業の二流浪曲師などは遠く及ばないうまみがあって、三味も自分で弾くという器用さもあった。

酒はずいぶん飲んだが彼が鼻下に髭を生やした頃は既に肺を侵されていたが、人格も同時に完成されて来ていた。死亡したのは、昭和四年五十六歳の時。青森市古川町の共栄館で開演中に倒れたのも芸人としては本望な死に様である。芸人として立った以上、彼の努力は食うためだとの非難も無理からぬ事であるが、単なる生活のための芸人ではなかった。

彼の津軽民謡に尽くした功績を偲んだ同村出身の友人、故やまと新聞総務山中利一氏は「桃地蔵」建立を発念し、同民の友人である棟方志功氏へ「桃」の風貌を伝えて地蔵尊の下絵を依頼していたところ、山中氏が糖尿病を再発し死期の近づいたのを知って、折よくスイス公使として赴任する栗原正氏の送別会に列席していた伊藤友太郎氏に依頼し、「桃」の親友であった青森市古川町中央座主成田雲竹氏の上京を求め地蔵尊建立の完成方を遺言し、同月二十日死亡したので、この意を継いだ雲竹氏は去月完成した志功氏の下絵を携えて山中氏の友人青森新浜町、石炭問屋福岡正雄氏に下絵を託し、ここに友人が相謀って一般有志からも基金を集め、いよいよ建立に着手する事となった。

(東奥日報 昭和十五年四月十一日)



人形芝居

原田万治

津軽に生まれ、津軽の風土に育った人達は、人形芝居といえは真っ先に金太、豆蔵の人形劇を思い出すのである。どうしようもない酒好きで、

することなすこといつも失敗ばかりという金太、義理と人情に弱いちよちよじの豆蔵この二体の人形のあやなすセリフはほのぼのとした与太(ここではふざけた意に解す)をとばし、日頃のつかれを笑いと哀愁のひびきに没頭させてくれる芸は大衆芸能として、最高の位置におきかえてもよいだろう。ことに人形の顔の表情は観るだけで吹き出したくなるような近親感を与えてくれる。

名画(映像)や名曲は、終演後でも人それぞれによってかきりない余韻を残してくれるが、金太、豆蔵劇は肩の張らないその場で忘れ去られても、いつか又観たい気持ちを抱かせるのは昔から育ってきた庶民的な勸善懲惡の思潮に依るところが大きいと思われる。

人形をやつる芸としては、現代において系統的にいろいろあるだろうが、平安時代以後から生まれてきた人形芸は時としては権力の走狗として利用されたり、呪詛(じゆ)を兼ね備えて民衆をしばりつけたり、その功罪の是非は別として芸能として現代に受け継がれてきたことは、時代を乗り越え人びとの気持ちをつかみ、共感を与えてくれる要素があり、大衆と

ともに歩み続けてきたからであろう。

人形劇は、人形遣いの操る人形で演ずる劇であるが、そのなかに手遣式と、糸操式の二種類がある。現在手遣式で有名なのは人形浄瑠璃に代表されるが、始めの頃は糸操式を用いたらしく傀儡師によって全国的に伝播されていた。傀儡(かいらい)はあやつり人形とか、他人に操られる者とかの意でここではただ単に人形という意に解釈しておきましたが、傀儡師は胸に箱をかけてその中から木偶(こく)人形を取り出し舞わせてその日の糧を得る大道芸人のことですが、それは生産手段をもたないというよりも、もつことのできない傀儡(かいらい)と呼ばれるさすらいの遊芸集団が人形(今と違って小さな人形)をご神体(ごしんたい)にみだてて、門付の形態を保ちながら村々を廻ったことから始まる。室町時代は特に盛んで簡単な曲芸や唄をうたい、女達は土地の男達と一夜の枕席にはべることもあった。

傀儡師達の遺産である人形が時代が下るにつれ様々な人形芝居に変化し、人形浄瑠璃という芸域に達したのである。人形浄瑠璃は等身大とはいなくても大の大人が三人掛りで操作するのだが、地方によっては複数で操ったり、一人で操ったりその土地、土地によっていろいろ工夫の変化がみられるようになった。江戸時代の一時期には歌舞伎を上まわる